

News
letter

噴火灣文化

[Funkawan Culture]

2009. 3 Vol. 4

Date City Institute of Funkawan Culture

伊達市噴火灣文化研究所

■インタビュー「*Fieldworker*」

【絵画】画家・広島市立大学名誉教授

野田 弘志…………… 3

■研究報告

【歴史・保存修復】

文化庁文化財部美術学芸課

文化財調査官

松本 純子

株式会社 半田九清堂 代表取締役

半田 昌規…………… 7

■研究報告

【哲学】旭川大学教授

信木 晴雄……………12

■評論

【音楽】ピアニスト

岩崎 淑……………13

■事業案内・次号予告…………… 16

表 紙

「バチラー夫妻記念教会堂」

撮影・解説：粟 島 暁 浩

受賞歴

平成 18 年 第 39 回道美展新人賞

個展・参加展

2008 年 6 月 モノクローム合同写真展「Peace Pieces」広島県旧日銀広島支店

12 月 写真展「味な人」だて歴史の杜カルチャーセンター

weblog http://blog.goo.ne.jp/hiro_photo72/

写真家・掛川源一郎氏がかつて撮影した教会堂の写真が目焼き付いている。

数件の家が点在した寒々しい雪の風景の中に佇む姿が記録された1枚。

アイヌ民族の方々の良き理解者として信頼されていたバチラー夫妻を記念し昭和

12 年、信者らによって建設されたその建物はモダンで、今なお存在感を放ち、歴史

を伝えている。

見慣れた風景も、吹雪の中、モノクロームの目で見ると、非日常のイメージが膨らむ。

地域に生きたバチラー夫妻の養女・バチラー八重子の生涯に深い畏敬の念を抱

きつつ、今の姿を写す。



「ザ・ウィンザーホテル洞爺リゾート&スパ」は
伊達市噴火湾文化研究所の活動を応援しています

「ザ・ウィンザーホテル洞爺リゾート&スパ」 電話:0142-73-1111
〒049-5722北海道虻田郡洞爺湖町清水

本社: 雑ザ・ウィンザー・ホテルズインターナショナル 代表: 03-5427-3000
〒108-0073東京都港区三田1-4-28

Fieldworker

【絵画】

「伊達から起こすネオルネッサンス」

画家・広島市立大学名誉教授 野田 弘志 氏



のだ・ひろし

現代日本を代表する写実画家。1936年生まれ。東京藝術大学美術学部油画科卒業。'90、'94年、ベルギー・ヴェルヌマン美術館で個展、'07年、東京・札幌で回顧展開催。受賞歴多数。

第四回目の「*Fieldworker*」は、写実画家として世界的に活躍されている野田弘志先生です。野田先生は、伊達市近郊に14年前からアトリエを構え、自身の制作に取り組む一方で、当研究所内で行っている絵画教室「野田・永山塾」（主催：だて噴火湾アートビレッジ実行委員会）において、芸術監督として無報酬で受講生の指導に当たってくれています。

世界に羽ばたく芸術家を伊達で育てようとの試みについて、先生の理念を中心に話を伺いました。

◆今日は黒のスーツをお召しですね

わざわざ黒にしたんです。西田正秋¹⁾を思い出してね。西田正秋ってね、僕が芸大入った時によくすれ違っていた先生で、いつも黒なんです。変な先生だなと思ったんですが、やはり解剖学、人間の死体を開くことと、美術・美学に関わっていく人間として、黒だったんじゃないかなと思うんです。

私も、自分のやろうとしている仕事は神聖な仕事だっていう自負を持ってやるべきかなと思っているんです。それで、態度で示すのはこれしかないのです（笑）。

◆アートビレッジ事業の基本理念は？

日本の美術・芸術全般の現状ですが、日本独自のものがあって、それに終始しているわけです。それは「もののあわれ」だそうです。丸谷オー²⁾など、いろんな人が言いますよね。その最たるものは川端康成のノーベル賞受賞記念講演です。ああいうものの精神が「もののあわれ」であって、それが今は「叙情」、「情緒」に流れている。

例えば日本人は清潔なものが好き、可愛いものが好きなんです。そこにもう一つ踏み込んだ精神っていうのがないんです。本当は清潔も精神なんです。

ところが、世界はその反対側を動いています。特に西欧の場合は中心になるのが哲学であって、宗教ですよ。自然も環境も違うとは思いますが、「崇高壮大」が目標のところがありません。ずっとたどれば、エジプトやギリシャからあるわけです。それらの時代を徹底しているのが、魂であり、精神であり、哲学であり、宗教に拮抗しているんですよ。それが途切れるとすればニーチェから崩れていく。

「神はもう死んだ」となるわけです。ただとえ無神論者でさえ、向こうの人は一神教の影響があって、一神教の体質を持っています。その正当の柱を作ってきたのはやはり精神であり哲学で、その目指しているものが絶対であって、壮大であって、力強さであって、理性と構築性の強いものなんです。

その反対側にピカーッと日本があって、違う方向にあると思うんです。日本人は様々なものや文化を最初中国や朝鮮から輸入して、西欧からも輸入したけれど、日本人には日本人魂があって、魂は一貫してきたんだという説を皆さんお言いになります。その日本魂って何だっていうと、さっきの日本の美学・美意識であって、それは万葉から古今、新古今、その間に培われたものでしょうね。文学からですね、その根っ子が「もののあわれ」でしょ。

今、いくらアメリカかぶれしている、ヨーロッパかぶれしている若者でも、ちゃんと精神みたいなものは日本的に持っているんですよ。彼らが日本の中で絵を描くと年寄り達が絵を買ってくれる、金持ちが絵を買ってくれる。その人たちの美意識は見事に日本の美意識ですからね。だから、ヨーロッパでいいとされているものは評価されなくて、日本だけでいいとされるものが評価されてしまう。そういう矛盾があるのです。

でも、僕はその中で日本の遺伝子を持ちながら、どういうわけかずっと西欧の美学にちやちやってるとですね。で、それが正しいと思っています。ただ、西欧のものは探れば探るほど奥が深いし、大変ですよ。だからずっと勉強しっぱなし。その中に真の創造の秘密が隠されている。同時に日本人だから日本のことも勉強しなければいけない。対比して考えることが大切ですね。でも、中心はどうしても西欧的なものなのです。

僕はルネッサンスをもう一回やるべきだと思っているんです。その中心となるのはリアリズムです。いろんな制約や、厳しさなどがあるわけですけど、そいつを絵描きとして徹底的にやりたいのです。

西欧には、西欧哲学があって、西欧美学があって、西欧芸術があるわけですけど、日本には当然ないわけで、よってリアリズムもない。ですから、日本で言うリアリズムっていうのは非常に甘いんです。表面的で記号的でほんとの意味でのリアリティはないと思うんです。そこで、ほんと



のリアリズムというものを立てたい。それを伊達から立てたいわけです。

そのためには一人じゃなんとも頼りないので、日本でこれから世界に出て行く優秀な人を集めようと思ったんです。結果として、僕が思う日本でのベストの2人、永山優子³⁾さんと廣戸絵美⁴⁾さん

が来てくれた。3人だと非常に具合がいいんです。

教えるにしても、教えるためには自分で体験して、必死でそこで戦っている、現場でやってる人間が教えなきゃ、教えることにならないと思うんですよ。音楽でいえば、ミケランジェリ⁵⁾はアルゲリッチ⁶⁾に教えだし、伊藤京子⁷⁾さんに教えだし、岩崎淑⁸⁾さんもそうです。あの人たちは教えるのが当たり前だと思ってるんですよ。指揮者もそうですよね。演奏家はみんなそうじゃないですか。音楽は技術が伝統的に繋がっていて、上へ、上へ積み重なっていく性格上、必然的に必要なものなんですよ。だけど、絵画にはないんですよ。あるとすると、職業としての絵画教室はありますが、理念を教えているんじゃないと思うんです。

◆岩崎叔先生が行なっている ピアノ・室内楽マスタークラスですね

音楽では世界中でやっているじゃないですか。

◆先生が目指しているのは音楽で言う マスタークラスでしょうか？

ほんとはそうですね。中でも小さい子どもたちを育てていきたいです。絵だって技術を伴うもので音楽と一緒にですから、現在やっている小学4年生からしっかりやったらすごいものになっちゃうんですよ。

◆音楽の場合は楽譜があって、それによって曲の 精神性を伝えることができますが、絵の場合は 難しいように思います。「野田メモ」はそれに あたりますか？

「野田メモ」⁹⁾を書いて皆さんにお配りしているのは、

僕がいくら理屈を言っても一つ信用されないところがありますが、フルトヴェングラー¹⁰⁾が言ったとか、ハイデッガー¹¹⁾が言ったとかいうとね、ちょっと「おっ」と思いますから(笑)。ですから、読書の勧めもありますし、それを使って自分の理念を説明するということをやっています。でも、それは一つの方法であって、「楽譜」にあたるものっていうのは、リアリズムで言えば「自然」ですよ。

例えば今、ロシア人女性を描いている。楽譜は彼女なんですね。彼女そのもの、人間も自然ですからね。もちろん、銀色の床と後ろの壁があり、その前に空間があるわけですが、そういう中に彼女がいるという現実があるわけですよ。その現実そのものが楽譜です。そこをどれだけ読むか、そこから何を発見するかが大事なんです。演奏方法は根本的には変わらないんですよ。

昨日ずいぶん古い音楽会評を読んでいて、ショルティのシカゴを吉田秀和が褒めている。ほんとにインテンポでね、それはすごい美しさがあると褒めているんです。インテンポって言うのは、ここにある、見えている現実をできるだけその通りに映すというのがインテンポだと思うんです。

私の使っているオーディオ再生装置のカタログに、「マッキントッシュ¹²⁾は根源的に正確に再生します」、「音響的味付けは一切しません」と書いてある。だけど、指揮者によっては、演奏家によってはめっちゃくちゃやらないですか。そのところが同じことですね。

ここが銀色で、だんだんグラデーションで暗くなる。これを完璧に写しとったら、この人物も、床も、しかも立体としてきちんと写しとったら、絵に空間ができて、そこに高い、ある現実が現れるじゃないですか。

そいつをデフォルメしたり、ありもしない色をつけてみたり、いろんなことをやるのが現代アートとされているんですが、それは現実ではないぜんぜん違うものを創作しようとしているわけです。そこに精神性とか内面性とか魂というものを含ませるというのは大変難しいと思いますね。

リアリズムは現実を見る、その人の見つけ方の深さによってそれをなそうとしている。例えば、ベートーヴェンがいくら精神的に深くたって、演奏家がそういうふうを受け止め



ていなければ譜面の読み方が違ってきますよね。それと同じで、現実を深く見つめなければ、読み方が違ってきちゃうんですよ。ですから、僕はあくまでもインテンポで、「根源的に正確に」。マッキントッシュと同じです（笑）。

それをやることで、自然が持っている無尽蔵なものへの発見があるわけですよ。科学だって自然を見つめることで発見していくわけですし、すべてそうですね。自然というもののほど完璧で奥が深く、しかも表面的で何も無いものはないのです。つまり、何も無いと思ったらこの空間は何も無いわけですけど、何か有ると思ったらいっぱい有るわけですよ。そういう部分があるじゃないですか。だから、生徒に正確に見つめる訓練、正確に見ることが出来る訓練をして、それを正確に再創造する訓練をする。それが原点だと思うんですね。それはどこも教えていないんですよ。なくなっちゃったんですね。まあ、日本には最初からないですけどね。西欧にはあったと思うんですね。だから、ラスキン¹³⁾やヴァレリー¹⁴⁾みたいな考え方がね。ちょうどああいう時期の人たちの考え方が徹底して厳しくて、完璧主義でいい時期かなって思っています。

◆絵画教室「野田・永山塾」は3年経ったわけですが、塾生に先生の理念というのは伝わっていますか

子どもたちがびっくりするほどまくなっていますよね。それと見つめ方がしっかりしてきているし、そこに問題はいくつもあるんですけどね。ほんとはね、正確に見て、正確に描くことだけを必死になってやっていたらいいんですが、子どもの場合もこれからはちょっと理論を入れてもいいかなという気がしているんですよ。

◆日常的に絵画教室で理念を教えられているのですか？

僕も永山さんもほとんど考え方は変わらないので、子どもたちはできるだけ永山さんに指導してもらっています。というのは、永山さんは現役の画家の中でデッサン力がナンバー1なんです。だから、木炭の使い方から正しい見つめ方まで教えられるんです。

理念について教えるかどうかですが、いろいろな問題があります。例えば、僕は中学や高校の教科書の監修を頼まれてやっています。そこでも、教科書の検定する側の顔色を窺ったり、採用されるかされないかを大事にして、採用する先生たちに気に入られることばかり考えるわけですよ。流行に乗っかっちゃうことを考えるし…。監修責任者である僕の思うとおりにはできていないんですよ。それが社

会なんだと思うんですね。

塾で教えているのにも反映してきますね。例えば塾に来る子どもたちにこっちの理念をそのまま教えたとしたら、混乱が起きると思いますよ。大人にもそうですね。でもじわじわ言ってますが。

というのは、正しく見るという事は恐ろしいことですからね。生き方も同時に含まれるわけで、絵を上手にきれいに書くとか、飾りになる絵を描くっていうんじゃなくて、そこに本質的なものを見つめる、正しく見つめる、真実を見つめるということを大事にするわけです。生き方から、社会のあり方から全部真実を見つめたらどうなるかって言うとても面倒なことになりますからね（笑）。

◆本質的なことを教えるとは？

受講生は我々の塾に来た時には塾用に勉強しているわけですが、外に出たら、外の美意識・美学であって、日本社会が持っている生き方、考え方に戻るわけです（笑）。たとえば、美術大学を目指す学生は受験の実技で良い評価を受けやすいように、石膏を大きめに描いたりします。

僕は今、原寸より大きく描いていますけれど、それなりの理由があって、大きく描いているんです。それ以前は、ほぼ原寸に見えるように描いていました。原寸に見えるようにするには、168センチの女性を描く場合は165センチくらいに描けばいいんです。そうすると原寸に見えるわけです。絵に描くとちょっと大きく見えるんですね。

だけど今描いているものは180センチくらいで大きいんです。今回は「聖なるもの」というタイトルで全部通して、THE-I、THE-II…としていこうと思っています。特に存在の厳粛さというか、人間の存在はこんなふうの高貴だよ、神聖だよ、という絵にしたいんです。そのためには裸が一番いいんです。そして、少し大きく描く。そうすることによって、この存在が崇高になると考えているんです。

大きく描くという意味を考える必要があるのに、「受験で入るため」というのは本質を外れています。



◆日本や世界の絵画の方向性を見たときに、
きちっとした教育をすべきという展望が
あるわけですね

本物の芸術の考え方ですね。その芽が吹いてくれればいいですね。見つめ方、あり方ですね。時間がかかることだから、特に大人も大事だと思っているんですね。

「大人の写実絵画コース」には様々なレベルの方がいますからね。その人たちに「なぜ描くんだ」って聞いて、適確に答えられる人は少ないですよ。

社会を普通に生きている人のあり方を、何の疑問もなく受け入れて、その中でうまく泳いで行こうってんじゃなくて、「より良く、正しく生きていくためにはどうあるべきか」ということを、絵を通して考えてもらいたい。そうすれば、絵をやめても、絵で考えた見つめ方や考え方が生きてくるんですよ。そのようにしたいんです。絵だけではなく、音楽や哲学もそうです。そういうことをしているところが日本にはどこにもないから、伊達から芽が吹いてもいいじゃないかと思っているんです。

伊達の方にお世話になっているし、すでに亡くなった何人かの人達から夢を託されているわけですから……。できることならやりたいのですが、難しいですよ。

◆2010年5月に行なわれる日本橋高島屋での
3人展は成果の一つでは？

そう思っています。廣戸さんはまだ若いですが、底力を持っています。永山さんは自分で考えて、自分の考えを自分流に表すところに入っています。

僕の場合は、回顧展¹⁵⁾を見ていただいたんで、ある程度「野田はこういう仕事をしているんだ」というのは見えていただいているわけですが、それは60年の積み重ねがあって、あれっばちですからね。永山さんの場合は3年目ですか、廣戸さんは1年ですよ。1年で1作できればできすぎなんです。こういうリアリズムっていうのは。

例えばモナリザが、ある本によれば5年がかり、ルーヴルから出た最新の本だと4年間だっているんですが、4年も5年も描きっぱなしってわけではないですけど、それくらいかかるわけですよ。そのモナリザがどの程度完成度が高いかという、もちろん内容は猛烈な完成度の高さを持っているんですが、上にある手はほぼ完成しているけど未完成で、下の手はもっと未完成です。だから、完璧にできあがっているわけではないんですよ。でも、ダ・ヴィンチは完全主義なんですよ。徹底的に厳密にやらなければいけない体質を持っている絵描きなんですけど、モナリザで

すらその程度ですから……。

高島屋での展示は、1年前から準備を始めていますが、2年がかりで2点ずつと、点数は少ないですがね。ちょっとスピードを上げてやらないとできないというか、命かけないとできないんですよ。

展覧会を楽しみにしています。ありがとうございました。



註

- 1) 美術解剖学者。1920年代から東京美術学校（東京藝術大学の前身）で「西田式美術解剖学」の講義を行う。
- 2) 小説家、文芸評論家。『樹影譚』で川端康成文学賞。『輝く日の宮』で泉鏡花文学賞。朝日賞受賞。芸術院会員。文化功労者。
- 3) 画家。だて噴火湾アートビレッジアートディレクター（2006年～）。
- 4) 画家。道銀文化財団の支援を受け、研究所内アトリエで活動中。
- 5) アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ（1920-1995）。イタリアのピアニスト。演奏家であるとともに熱心な指導者としても知られる。
- 6) マルタ・アルゲリッチ（1941-）。アルゼンチン出身のピアニスト。
- 7) ピアニスト。大分県別府市在住。東京藝術大学卒業後ミュンヘンに留学。アルゲリッチに師事。別府アルゲリッチ音楽祭総合プロデューサーも務める。
- 8) ピアニスト。2007年から伊達市にて「岩崎淑・ピアノ・室内楽マスタークラス」を実施。
- 9) 美術関係者や絵画教室受講生に配布する講義要旨。
- 10) ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（1886-1954）。ドイツの指揮者。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督を務めた。
- 11) マルティン・ハイデッガー（1889-1976）。ドイツの哲学者。
- 12) 米国製のオーディオ装置。
- 13) ジョン・ラスキン（1819-1900）。イギリスの美術評論家。「自然をありのままに再現すべき」との思想を持つ。
- 14) ポール・ヴァレリー（1871-1945）。フランスの作家・詩人・評論家。
- 15) 2007年に開催した「野田弘志展～写実の彼方に～」。東京、大阪高島屋（5月）、北海道立近代美術館（7月）。約90点を展示。

「重要文化財 蝦夷三官寺善光寺 関係資料の保存修理」

文化庁文化財部
美術学芸課
文化財調査官
松本 純子



株式会社半田九清堂
代表取締役
半田 昌規



■はじめに

「蝦夷三官寺善光寺関係資料」は、蝦夷地直轄政策に伴い、文化元年（1804）に江戸幕府がウス（現伊達市有珠地区）に建立した浄土宗の寺院・善光寺に関する資料であり、蝦夷地における仏教史研究のみならず、幕府の蝦夷地政策やアイヌ史研究上重要な資料群として、平成17年重要文化財に指定されました。背後に有珠山を抱える地理的な特徴から、江戸時代にも二度の噴火に見舞われながら、その難を逃れ、現在に伝えられた資料ですが、作られてから二百年程の間に進んだ著しい劣化により、重要文化財指定時には早急に修理が必要な状況でした。そこで傷みの甚だしい資料を中心に、平成18年

度から所有者である善光寺と伊達市のご協力のもと、国からの補助金を活用した修理事業を実施しています。

ここでは、これまでに修理を行ったものを例に「文化財修理」の概要について触れ、後半では実際に修理にあられた技術者の視点から、修理の詳細をご紹介します。

■文化財修理の基本的な考え方とその意義

文化財の修理は「見た目を綺麗にする」ことが本来の目的ではありません。現在に残された資料の価値を最大限将来に伝えるために、劣化を促進させる要因を取り除き、脆弱な状態を緩和することが第一の目的です。そのためにはまず資料の劣化状況と作成された当初の情報を正確にとらえることが大切で、事前に詳細な観察・調査を行い、最善の方法を検討します。時には非破壊の方法による科学的な分析も行い、修理を行う際の参考とします（写真1）。また使用する材料も、伝統的に用いられ、文化財に悪い影響を与えないもの、各々の文化財に最も適したものが選ばれます。



写真1：東京文化財研究所での分析の様子

写真2は平成18年度に修理を行った資料の修理前の姿ですが、同じ資料に光の当て方を変えると写真3のようになります。この資料は長年の間に繰り返された温湿度の大きな変化を受けて、資料とこれを装幀する表具全面の糊の接着力がなくなり、あちこちで紙や表具裂が浮いた状態でした。さらに、長年掛けたまま外気や光に触れる状態であったことも相俟って、全体に紙や表具裂が硬く劣化し、柔軟性が失われていました。そのため、あちこちに強い折れが入り、このまま放っておくと折れ山から裂けてしまいかねない危険な状況でした。また、写真では目立ちませんが、資料の表面は舐めるように虫に喰われ、カビの被害も受けていました。作られてから長い年月を経て、様々な要因から傷みの進んだ資料は、満身創痍の老人のようなもので、これを大手術することは容易なことではありません。実際の修理の際は、デリケートな資料を傷めることのないよう細心の注意を払いながらの作業となります。写真4が修理後の姿で、強い折れ

は緩和され、柔軟性が取り戻されたことで、安全に保存・公開できる状態になりました。

ただご覧のように、資料の右側に雨漏り等であつてしまった強い水ジミは残されることとなりました。強力なクリーニングをすると資料そのものを傷めてしまうためです。手術後に老人が若返ることはないように、修理を行っても、劣化の痕跡が全てなくなり元通りに戻るわけではありません。そのため、日常の保存や展示の中で、いかに傷めないようにするかということが非常に重要なのです。

また善光寺の資料は、江戸時代に作られてから今まで、本格的な修理が一度もなされていないものが多いことも特徴です。それだけに、劣化は進んでいるものの、作られた当初の情報が豊富に残されているといえます。そのため今回の修理では、作られた当初の情報を尊重し、保存上やむを得ない場合を除き、再使用できるものは原則として当初用いられていたものを使用しました。平成19年度に修理を行った「仏説



写真2：文化十一年公案・修理前



写真3：同・修理前(斜光による撮影)



写真4：同・修理後

無量寿経」は、長年光があたる状態であったために、表紙の褪色等も進んでいましたが、箱館奉行の戸川安論(やすとき)が書写した文化4年(1807)当時の装幀であったと考えられるため、修理後もこの表紙を再度使用しています。修理後のお経の表紙に色あせたものを用いているのは、見た目を綺麗にすることを第一とする修理方針をとらず、作られた当初の姿を伝えることが資料の価値を尊重することになると判断したためです(写真5)。

なお、先程ご紹介した写真2の資料では、表具が損傷していたため、軸木の墨書が一部のぞいている状態でした。今回修理を施すことにより、この墨書は「文化十一戊八月廿八日／福田喜右衛門／麻布栄蔵仕立」と記されていることが確認できました。この資料は文化11年(1814)に本山である江戸の増上寺の大僧正が経典の解釈に関する課題を記し、善光寺の三世住職弁瑞へ与えたものですが、この墨書の発見により、弁瑞がこの資料を与えられた後すぐに掛軸に仕立てさせたこと、また、実際に仕立てたのは江戸麻布の栄蔵という人物であったことがわかったのです。

このように修理は、資料が作られた当時の状況や、作成の技法等を垣間見ることができる貴重な機会でもあります。

■ 修理工房における文化財修理の実際

損傷した文化財を修理することは、人間に例えれば重症患者を手術・治療し、リハビリ後、社会復帰させることに似ています。まず、工房に運び込まれた文



写真5：仏説無量経 表紙

化財はいきなり修理せず、手術前の検査のように、顕微鏡や赤外線など光学機器による写真撮影なども含めて、損傷状態の様々な調査・記録を行い、それをもとに、文化庁修理担当調査官と修理技術者によって、どのように修理するか、最善の方法を検討し修理方針を立て、それに沿って修理技法・修理材料を修理技術者が吟味し、修理にとりかかります。

修理作業の大きな流れは、「カビ・害虫駆除等修理作業前処置」「分析・調査・修理前記録」「装幀の解体」「汚れ除去」「絵の具等の剥落止め」「旧裏打ち紙除去」「欠損部補填(補紙)」「新規裏打ち」「折れ防止処置(折れ伏せ)」「表装修理・新調」「軸手当」「接合・仕上げ」「収納箱作製」「修理後記録」です。ここでは紙面に限りがあるため、重要かつ最も大変な作業について、文化11年の「公案」と「仏説無量寿経」を例に説明します。

前項でも取り上げられた文化11年の「公案」は、「分析・調査・修理前記録」の段階において、使用されている料紙(以下、「本紙」という)の組成を高知県立紙産業技術センターで分析した結果、竹繊維で作られた紙、「竹紙」であることがわかりました。「竹紙」



写真6：文化十一年 公案修理前(部分)

は、日本国内で漉かれていた「楮紙」等の和紙と違い、中国で長期間かけて発酵させた竹を細かく碎き、短くて細い繊維にして漉いた、きめが細かく表面の滑らかな紙です。「竹紙」は、美しく和紙にない風合いを持つため、日本国内では作ることの出来ない中国からの舶来品として、江戸時代には珍重されました。今回の修理では、汚れや損傷によって失われたこの「竹紙」特有の風合いを、修理によってどれくらい取り戻せるかが課題でした。修理前の状態は、表面に積もるほどの泥や埃の汚れ、強いシミ等がありましたが、これを綺麗にするために薬品を用いれば、紙を傷め、風合いを損ねる危険が高くなります。そのため、薬品等は使用せず、表面に積もっていた汚れを乾いた柔らかい毛の刷毛で払った後で、水道水から有機物、鉄分、塩素等を取り除いた常温の濾過水だけを使用して、本紙を傷めないように、優しく丁寧に時間をかけて汚れやシミを除去していきました。旧裏打ち紙をはがす作業でも、本紙を傷めて、風合いを損なうことのないように、神経を細かく行き届かせながら作業を行いました。また、本紙が竹紙であったことをふまえ、補

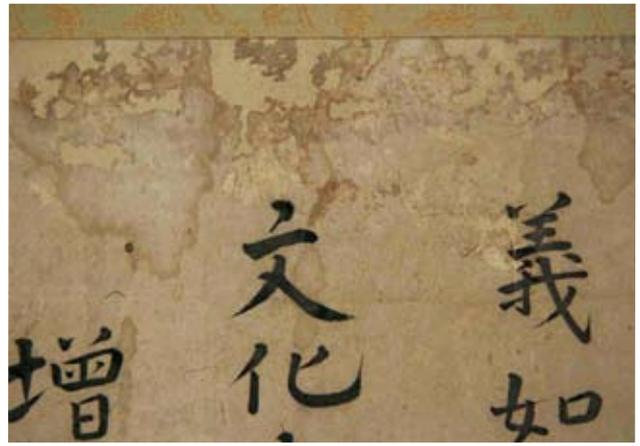


写真7：同・修理後(部分)

修に用いる紙も、本紙にあうように色味を調整して染めた中国製の竹紙を使用しました(写真6・7)。

「仏説無量寿経」は、藍色に染められた紙に金泥(金粉を膠で溶いたもの)で罫線を引き、経文を記した紺紙金字経ですが、修理前は紺色を感じられなくらいに白色の物質が本紙の表面を覆っていました(写真8)。汚れは層が厚く刷毛跡のような筋が見られたので、何かを刷毛で塗ったことによりカビが発生したのではないかと推測しました。そこで、汚れの白い物質を工房内において顕微鏡で調査するとともに、外部の機関へも分析を依頼しました。専門機関による分析の結果は、「白い汚れ」は「カビではなくデンプンを含む不定形物質を主体とするものと考えられる」というものでした。その結果を踏まえ、「汚れ除去」の工程において、表面上の埃や虫の糞などを除去した後、薬品などの化学物質を使用せず、水道水から有機物、鉄分、塩素等を取り除いた常温濾過水だけを用いて、筆で根気強くぬぐい、時間をかけて少しずつ「白い汚れ」を安全に除去していきました。そのため、全七巻、全長延べ33メートル以上の本紙の汚れ除去

作業を行うのに約3ヶ月の期間を要しました(写真9)。
殺菌処置のため、汚れた箇所へ必要最小限消毒用
エタノールを使用しましたが、そのほかの工程では前
述のように薬品を用いず修理ができたのです。損傷
の著しい衰えた文化財に負担を強いることなく、損傷
要因を取り除くことができ、望ましい結果であったとい
えます。

「仏説無量寿経」は、紺紙の裏全体を白い紙で裏
打ちされていました。「蝦夷三官寺善光寺関係資料」
全体の修理方針としては「原則として製作当初の状
態を尊重し保存上やむを得ない場合を除き、再利用
できる材料は当初のものを使用する」というものでし
た。そのため、もとの裏打ち紙をはがす工程において、
この裏打ち紙を再利用することが可能なように、本紙
のみならず、裏打ち紙も傷めないように時間をかけて
丁寧にはがしてゆきました。この作業は1ヶ月半かかり
ました。しかし、はがす過程で、経文に接している裏打
ち紙に文字や罫線と重なるように変色した部分があ
ることがわかり、変色の原因をさぐるため、東京文化
財研究所において非破壊分析を行いました。残念な

がら変色の要因になる物質の特定はできませんでし
たが、裏打ち紙から鉄分等が検出され、裏打ち紙自
体の劣化も認められたこと、裏打ち紙に施された切箔
が本紙に悪影響を及ぼす可能性があったことから、
苦労して剥がした裏打ち紙は再使用せず、新しい和
紙をもとの裏打ち紙に近い風合いに加工し、新しく裏
打ちを行いました。

このように修理の実際は、作業時間や作業の苦労
を惜しむことなく、文化財の安全と健康を第一として
治療に取り組むべく、工房での修理が行われており
ます。

■おわりに

資料は、修理という手術をしてもデリケートな状態
であることに変わりはありません。今後永くこの資料を
伝えていくためには、温湿度の安定した環境の中で、
保存に留意したうえで展示を行うことが大切になりま
す。北海道の歴史を知る上で貴重なこの資料をより
よい状態で伝えてゆくために、今後も皆様のご理解と
ご協力が得られましたら幸いです。

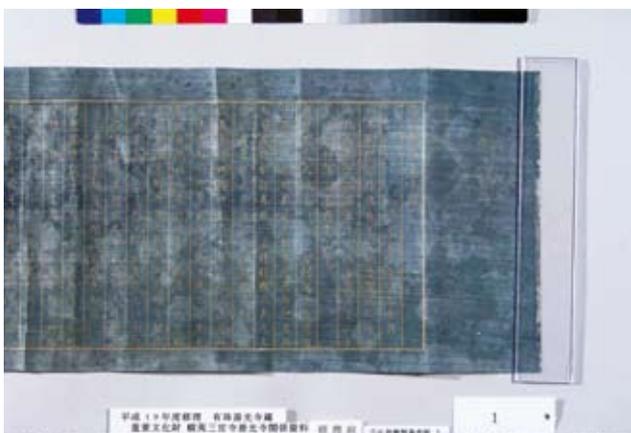


写真8：仏説無量寿経・修理前

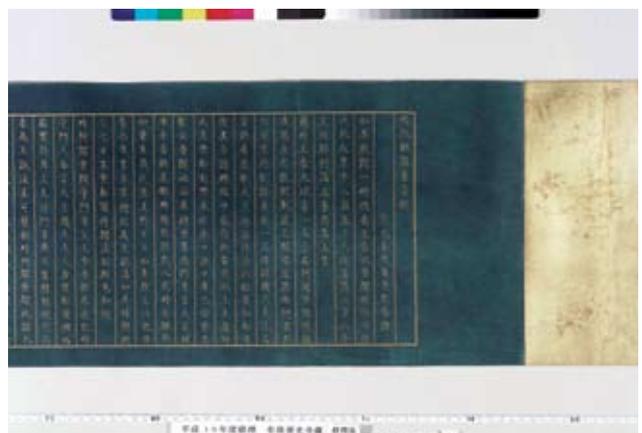


写真9：同・修理後

「見えない壁と崇高な精神について」

旭川大学教授 信木 晴雄



これからの仕事はそれが現実になされなくても誰もそれほど気にも留めない。もしこれからずっと努力を続けていたらその結果得ることになるだろう大いなる恩恵を本当に苦しみながら求めることは、その逼迫性はその人ごとにちがっている。未来を描く者にとって希望とは彼自身の現在の似姿を宿すものになる。

もし何もしないことでずっと後になって自分のしなかった所業を目の当たりにする者は、自分の無為の産物についてどのような負い目を感じるのだろうか。一生懸命生きなかったことで得られなかったものをあえて失ってしまった可能性のうちに数えることは一時的にはよくあることだ。だが、本当に見えない壁を見ようとするならば、われわれがあえて手間暇かけて大切なものを獲得しようとしなない怠け者の本性から抜け出られないこともここに認めなければならぬ。

時間は過ぎ去るばかりで誰一人待ってはくれない。手をこまねいているうち何もかも終了し、私が本当は何かを得ていたかも知れないという密かな案内について知ろうとしなければ、私はその失ってしまった大切な真実を決して捉えることはない。ぐずぐずしていると何もかもが潰えてしまうのが人間性の宿命である。

人間にとって自由とは限られた選択肢のことであり、その地平まではいたらぬ。

私はどこの誰を両親とするのか自ら選んだことはなく、私の育った環境も教育もすべてがどこからか与えられた恩恵であったことに私は心から感謝しなければならない。不自由さが人間の本質であることを認めよう。潰え去るこ

とはその中からごく限られた可能性だけが人間の中に実際に注ぎ込まれ、それが不思議な愛という結実をもたらすことになる。一切が宿命であることはネガティブにとらえようとするればわれわれからまったく気力をそぐのだが、絶対的な不自由を喪失のさなかでも失われぬ言わば救済の光として理解するなら、そのとき初めてへりくだった人間性は美しい精神に近づけよう。

見えない壁とは私がそれを意識しようとしなない限り、いつも立ちはずかっている。私は壁の前まで来て、「ここまで来たのだからもう自分は十分に生きた。」と、満足しあかかも自由意思でそこに立ち止まっても本当は壁にゆき詰まったのでしかないことに無頓着でいていいのだろうか。もし得ようとしたのなら、感謝の道を見つけようとするのなら、もしかしたら私が見出した崇高な精神はその場で感謝することによって素晴らしい幸福感をもたらすだろう。だがそれを得ようとしなないというごく普通の生では壁こそが損失をもたらすという真実を教えてはくれない。

人間はそれなりに自由に生きていけるといふあまりにも素朴な思いあがり人が知らずに傷つけている。では人は宿命に唯唯諾諾としなければならぬものなのか。いや見えない壁とはあえてしななかったこととすることとの間を横切る差異に無頓着でいられる私を包む無自覚である。

「出会い」

ピアニスト 岩崎 淑



©林 嘉代輝

人生の中で出会いは大きなポイントとなり、それによって右へ左へと方向が変わっていくことになる。私はさまざまな場面で、とても重要な出会いに恵まれていて、これがなかったら、とても今日の人生を生きていないだろうと思われる。

第一番目は私が17歳の時だ。レストランバーでアルバイトとして6.00PM～9.00PMまでクラシックのピアノ曲を弾いていた。そこは銀座のど真中で外国人、有名俳優がいつも来る店だった。女優の有馬稲子さん、左幸子さんもいらしてリクエストしてくれた。

そこへ米国人のビジネスマン、クラーク氏が3日間美しい日本人女性を伴って現れた。最後の日、「私は貴女のピアノをととても好きだけれど、アメリカへ留学する気はないかね」ときかれた。その頃、外国へ行ったのは小沢征爾氏くらいで、他に1人、2人しか留学していなかった。「とてもお金がないので…」と口ごもっていたら、名刺をくださって、「もし、アメリカへ来たい時は私に手紙をください」といわれた。

それから7年後、私が24歳の時、「毎日音楽コンクール」を受け、予選をトップで通過していたにもかかわらず、本選で失敗し、賞を逃した。弟の洸は16歳で初めてのコンクールを私と同時に受け、特賞をとった。私は自分のふがいなさとかやしさに涙の毎日を送っていた。

この時、ふとクラーク氏の名刺を思い出し、アメリカに行きたいと希望の手紙を書いた。7年後にもかかわらず、覚えてくださっていて、クラークさんと、夫人となられた通訳をされていた美しい女性とともに、私のアメリカでの保

証人となってくださり、私の留学が実現した。

2番目の大きな出会いはホテル沖縄ムーンビーチの神山芳和専務である。

1979年5月に初めての沖縄での演奏会后に立ち寄ったホテルムーンビーチで出会った。そして波打つ青い海辺に魅了され、音楽祭を開きたいと話したことがきっかけで18年もの長い間、「沖縄ムーンビーチミュージックキャンプ&フェスティバル」が開催できた。音楽に理解の深い神山さんに出会わなかったら、私たちの夢は実現しなかった。

留学した時のハートフォード大学音楽学部でのジェコブ・ラティナ先生との出会いも重要な意味を持つ。私のピアノテクニックの基本を教えていただいた。そして、イタリア、シエナのキジアーナ音楽院のロレンツィ、ブレンゴラー両教授との出会いが、私に室内楽助手として20年もの長い間、夏をイタリアで過ごすことができたのだ。これも、やはり運命的な出会いからだ。

伊達市噴火湾文化研究所の絵画教室を指導されている野田弘志さんは30年来の友人である。野田さんとの出会いを通じて、野田さんの絵画への芸術的・精神的高さや夢をきき、励まし合ってきた。「伊達市で音楽と絵画の両輪で子供たちを育てたい」との野田氏の夢を実現するべく、私も励みたいと参加させていただいている。

所長の大島直行氏は、奇しくも私のファンでいらしたとこのことで、初期の頃からの私のLPレコードを持っていらして、本当にびっくりしている。

これこそ出会いのすばらしさである。

伊達に育つ文化

太古の縄文文化から中世・近世のアイヌ文化、そして亘理伊達家主従の移住の歴史。
これまで、噴火湾とそれを取り巻く自然の中で伊達市にはさまざまな文化が育ってきました。
伊達市噴火湾文化研究所では、その文化の一つひとつを「保存」するだけでなく、
「まちづくりの資源」として役立たせるための調査・研究を行っています。

いっしょに活動しませんか？

研究所の活動を支え、噴火湾の文化を子どもたちへ引き継ぐ
架け橋となるためのボランティア組織が「かけはしの会」です。

かけはしの会の活動内容

- 1 文化と自然を生かした「まちづくり」についてのさまざまな提言や活動を行います。
- 2 学会・シンポジウム・学術講演などを行います。
- 3 自然教室・文化教室の開催やジュニアボランティアの育成を行います。
- 4 データベースの作成・補修・復元などの資料の整理保存を行います。



どなたでも入会できます。

年会費 1,000 円 (高校生以下 500 円)

「かけはしの会」事務局にお申し込みください。



申し込み・お問い合わせ

伊達市噴火湾文化研究所文化課

「かけはしの会」事務局 TEL. 0142-21-5050

〒052-0031 北海道伊達市館山町21番地5 FAX. 0142-22-5445 e-mail: bunka@city.date.hokkaido.jp

市民学芸員を めざしませんか？

■ 受講資格 / 高校生以上 (市外の方も可) 随時受付しております。

市民のみなさん一人ひとりの能力・知識に博物館学の専門知識をプラスすることで、まちづくりに活かされる研究になります! 学ぶ楽しさと、社会に貢献する喜びを多くの仲間とともに味わってみませんか!?



受講料無料

博物館実習

大学で学芸員資格の取得を目指す学生と一っしょに受講していただきます。

教養科目

研究所主催の講演会・学会・コンサート・美術展等に参加してレポートを作成します。

修了論文作成

実際の学芸員には専門分野があります(歴史・考古・民俗・絵画・生物など)。市民学芸員も修了論文の作成を通じ、それぞれの専門分野を確立してもらいます。自由なテーマで論文を作成し、研究成果は展示や講演などに活用されます。論文作成の指導は研究所の学芸員が行い、必要に応じて、所員以外の専門家のアドバイスももらえます。

修了論文のこれまでの事例

- ◎胆振線の誕生から廃止を振り返って
- ◎伊達市開拓記念館の「洛中洛外図屏風」について
- ◎カンタンの鳴き声と飼い方
- ◎伊達市開拓記念館の合わせ貝と貝桶について
- ◎虚説「南部藩士による室蘭南部陣屋の焼棄と撤退」を検証する
- ◎巨理伊達家における伊達市所蔵の産着・祝着

その他、趣味で集めたコレクションや食べ歩きの情報なども十分研究対象になります。得意な分野をまちづくりに活かしてください。

以上の課程を修了することで、市民学芸員としての資格が認定され、文化行政に専門的見地から参加・協力していただくことになります。

— 申し込み・お問い合わせ —

伊達市噴火湾文化研究所文化課

〒052-0031 北海道伊達市館山町21番地5 TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445
e-mail : bunka@city.date.hokkaido.jp

●2008 年度事業案内

- 4月24日
アートビレッジ文化講演会
「永山優子・野田弘志が語るウルビーノ・ビーナスの世界」
- 5月17日～25日
木地師「府川 晃の世界」展
- 6月22日
第14回カムイノミ・イチャルパ祭（有珠）
アイヌ民族伝統の、神に祈りを捧げる儀式
- 7月7日
北海道・洞爺湖サミット関連展示
カナダ、ハーバー首相来訪にあわせた文化財の展示
- 8月4日～5日
「画伯にチャレンジ」北海道ジュニア美術セミナー
- 8月10日～20日
野本醇北海道文化賞受賞記念展「心象表現の軌跡」
- 8月16日～24日
写真家「早坂禎治の世界」展
- 8月23日～25日
岩崎淑ピアノ・室内楽マスタークラス
- 8月26日
岩崎洗・岩崎淑チェロ&ピアノデュオリサイタル
- 9月17日～30日
NHK大河ドラマ「篤姫」と宮尾登美子展
- 9月20日
第4回縄文の森収穫祭
- 9月20日～28日
掛川源一郎追悼写真展
- 10月18日
NHK 解説委員毛利和雄氏講演会
「世界遺産と北海道・北東北縄文遺跡群」
- 2月2日
噴火湾北岸縄文エコミュージアム開設
- 3月15日
第7回伊達市文化財ボランティアフェア

●トピックス（研究所の後援ほか）

- 5月11日
善光寺フォーラム2008（有珠善光寺）
- 6月8日
フォーラム「縄文遺跡群を世界文化遺産に！」
- 7月24日
第47回北海道博物館大会
- 9月7日
第11回だて噴火湾縄文まつり
- 9月26日
北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群が世界遺産国内候補に選定
- 11月25日
21世紀市民プロジェクト“ミュゼ”設立総会

●2006～2008年度の主な研究業績一覧

〔著書・論文・資料紹介〕

大島直行・黒田格男・古原敏弘・小川正人 2007.3：伊達市噴

火湾文化研究所所蔵のジョン・パチラー関係資料 2，北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要，第13号。

青野友哉 2007.8：貝製玉類製作のムラ-船泊遺跡-，縄文時代の考古学6，同成社。

青野友哉 2007.12：北黄金貝塚における植生復元と活用，遺跡学研究第4号，日本遺跡学会。

青野友哉 2007.12：まちづくり資源としての文化の研究と実践，文化庁月報，文化庁。

青野友哉 2008.1：北黄金貝塚における史跡の教育的活用，遺跡の教育面に関する活用-平成18年度遺跡整備・活用研究集会（第1回）報告書-，奈良文化財研究所。

大島直行 2008.4：縄文時代人の虫歯率，縄文時代の考古学10，同成社。

青野友哉 2008.10：北海道における貝塚文化の消長-縄文時代～近代の生業と祭祀-，地域と文化の考古学II，明治大学文学部考古学研究室。

〔講演〕

黒田格男 2008.1.27：伊達市開拓期の原風景，冬の自然勉強会2007

大島直行 2008.11.1：第5回室蘭工業大学テクノカフェ「縄文時代のものづくり」対談

大島直行 2009.1.28～3.25：道新文化センター特別講座「縄文世界への遙かな旅」

〔学会発表〕

青野友哉 2009.2.28：新たな文化振興の在り方を模索する伊達市の取り組み，文化政策シンポジウム「文化資産の活用と地域文化政策の未来」，ヘリテージ・スタディーズ研究会〔千葉商科大学〕

●第5号予告（2010年3月刊行予定）

■インタビュー「Fieldworker」

【アイヌ・アイヌ文化】札幌大学教授 本田 優子

■講演録

【文学】作家・精神科医 加賀 乙彦

■研究報告

【考古】北海道大学大学院教授 小杉 康

■学会発表要旨

【文化】伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉

■研究報告

市民学芸員による研究成果 だて市民学芸員の会

Newsletter【噴火湾文化】第4号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

〒052-0031 伊達市館山町21番地5

TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445

E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp

URL http://www.funkawan.net/index.html

●印刷（有）村上印刷

〒052-0026 伊達市錦町95-1

TEL. 0142-23-2625 FAX. 0142-25-2459

2009年3月31日発行